
瞳の中

?時価

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瞳の中

【Nコード】

N7314Z

【作者名】

? 時価

【あらすじ】

高校の入学式で倒れた堂本疾は、運ばれた保健室で黒髪で陰気な霧囲気の青い目をした保険医と出会う。疾は保険医の陰気な霧囲気と不釣り合いな青い綺麗な目に惹かれ、内緒の恋人になるが、その直後疾は体が動かなくなり倒れてしまう。

疾は運び込まれた病院で自分が奇病、ドッペルゲンガー症候群にかかっていることを告げられる。

(ドッペルゲンガー症候群、今話題ですよ。数万人に一人が発症する奇病。自分の理想が具現化して自分の命を奪い、殺してしまう病気。私達の取材する病院の……)

保健室についてあるテレビがガヤガヤと喋ってる。耳障りなテレビを横目に私は大好きな保健室の先生に話しかけた。

「先生、女の子の全部……知りたくない？」

オキシドールのツンとした匂いが鼻につく。ベッドが均等に並べられた保健室はなんとなくエロティックだ。白いシーツ、いろんな人の匂い、消毒液。

きつとこの場所で体を重ねた生徒もいることだろう。秘密の園なのだ。ここは、誰かと一つになれる場所なのだ。

私は保健室をそういいういやらしい目で見ている。

黒髪の黒縁メガネの白衣を着た長身の先生は茅野空という爽やかな名前にもかかわらず、陰気な雰囲気纏っていて、その陰気さが私はとても好きだった。

「女の子の秘密なんて好きなのは、中高生のAV好きの男子だけだよ。大人になれば嫌でもその秘密を知ってしまう。知ったら、後は引きずりこまれるだけだ。純粹だった頃には戻れない。薄汚れてそれを正当化するために行為を繰り返す。それは醜いと思うけどね」
空先生はそう言ってブラウスを脱いでブラジャーを外そうとしている私に白衣をかけて、机に置いてあったまだ湯気の立つコーヒーに口をつけた。

「先生は純粹なのが好き？」

私は脱いだブラウスを着直して先生に問いかける。暖房がかかっているも地肌冷えたブラウスはひんやりとして身をすくめた。

「先生が好きなら、私は先生とエッチするのはあきらめるよ。だからキスしてよ」

コーヒーを飲みながら先生は私の方を見ている。私の後ろには窓がある。きつと先生は私なんか見ていない。見ているのは同じ名前の青空なのだろうと思った。

「君を大切にするっていったら？」

「聞いてない」

即答すると先生は大きさに笑う。それでもその頬笑みは嘲りや自傷のような刺々しさを持っていてやはりこの人が好きだと思った。

「先生が好きな。暗くてじめじめしてカビが生えそうな陰気さが好き」

私が何の罪悪もなくいうと先生は少しだけ眉をつり上げた。

「どうせなら、先生のもっといいところ好きになれよ。あるだろ？」

顔だつて不細工じゃないし、優しいし」

私は必死にそう言い募る先生を心がきゅつと締め付けられるように可愛く見えて悶える代わりに笑った。

「知ってる？ いいところない人ほど自分のいいところは優しさだつていうの」

先生は黙った。

「ねえ、先生キスしてよ」

「もう、ダメ」

「なんで？」

私は至って真面目に聞いているのに、先生は困ったように笑うことしかできない。その時またもや思うのだ。困った顔の先生が好きだつて。

困った顔、傷つけないようにしてるんでしょう？

私が後で後悔しないように、私を傷つけないように言葉を選んでいくんでしょ？

私はそれを問わないけれど、優しさが骨に沁み入る。まるで毒のように熱く、ドクドク血管に骨に……全身に。沁み込んで頬を火照らせる。

「先生、好きだよ。例え、死んでも好きだよ」

先生は拒絶するように耳を両手で塞いだ。先生は私が好きだ。それでいい。それだけで私は何も望まないから。

「先生、私の病気判明したよ。ドッペルゲンガー症候群なんだって」
先生は何も言わず、悲しく目を見開いた。その悲しい驚いている様子さえ、ああ、好きだと思った。

私と先生が出会ったのは高校の入学式だった。

不運な事に初日に風邪をひき、足取りもおぼつかないで行った入学式で倒れ、運び込まれた保健室で先生はその陰気な顔で私の看病をしてくれた。

熱がある時というのはどうしてか心細くて、ずっとそばに居てくれた先生が神様に見えた。

黒縁メガネは根暗に見えて陰気な容姿に拍車をかける。加えて低すぎる地響きみたいな陰気な声、空のような青い目。

熱に浮かされながら、先生の目はさながらパライバトルマリンのように希少でネオンみたいに輝いていた。

まるで夜の鴉みたい。真黒なのに目だけとてもきれい。

「せんせ、目、綺麗。ハーフなんですか？」

息も絶え絶えに私が先生に聞くと先生は、暗くどこか毒のある笑みを浮かべてこういった。

「俺はクォーター、祖母が外国人なんだ。……君こそ目の色が綺麗な緑色してるな……ハーフなの？」

「いえ、私は……目の色素が薄いだけです。光に弱くて……だからスモークのかかったメガネをしてるんです」

私がベットの上で話すのも辛そうにしていると先生が私の目に手を当て眠るように促した。

「そう、じゃあもう寝なさい。僕らの目は光に弱いんだから」

私は目に当てられた手にドキドキしていた。冷たい先生の手、低すぎて消えてしまいそうなほど優しく発せられた言葉。

優しさ。

「……泣いていいですか？」

鼻がつまっていて最早、泣いてるのかも分からない私がそういうと先生はティッシュを私のベットに置いて後ろを向いた。

私は泣きじゃくった。優しさは玉ねぎのように目に沁みる。否応なしに涙を出させる。ずっと一人ぼっちで邪魔ものだったから、私は優しさなんか慣れていたのだったのだ。

人と関わるのが極度に下手で、今までそこに居るだけのマネキン状態。そんな私だから入学式はきちんと出たかったのだ。せめて名前を覚えてほしかったのだ。後は空気に混じって消えたっていい。名前だけは記憶に残りたかった。

あとでどうして後ろを向いたのか聞くと、泣くのを見られるのほど悔しいものはないからだと言った。

何も聞かなければそれは冷たく突き放した行動に見えるのに、先生は陰気なくせに優しい。

人は優しさを見せびらかす。

藁をもつかむ優しさに飢餓した人間は、その見せびらかされた優しさに食いついてその偽善さえ利用して自分を守ろうとする。私はどちらでもないから傷ついて、この人もどちらでもないから不器用なんだと思った。

ずる賢く生きる事が嫌なら、自分を正当化して生きればいいのに自分が全て間違っている気がしてたまらない。自分は間違いながら衝突してばかりで生きていく。

そんな不安定さの中で、誰かの愛してるという言葉が欲しかった。

けれど先生が言った通り、私の目は光に弱い。甘ったるい生活に慣れ切ってしまったら、きつともう二度と一人では立てなくなる。それが何よりも怖かった。

目がくらむほどの優しさは私の心を凍らせて、狂ってしまうほどの恋しさに焼かれて寂しさで絞殺される。

だから私は求めなかった。

先生が好きでも、何も求めたりはしなかった。

それから私は普通の生活を送っていた。普通というのは曖昧なもので、私にとつての普通は苦痛な生活と言う事だった。緑の目は異質だった。異質は疎外されるものだ。S極とN極が互いを嫌うように私は弾かれ、一人ぼっち。

この目を道具にすればいい。

私の目綺麗でしょ？ って笑いかければいい、人の中に入って適当に気を使って適当に笑っていればいい。笑顔は最大の武器なのだから。

笑ってる顔に敵意は感じない。笑えよ、自分。

それでも私は笑う事が出来なかった。おかしいと微笑むことができない。楽しいとお腹を抱えて笑う。自然と出るものを故意に出すことなんてできるのだろうか？

薄いスモークのかかったメガネ越しに私の笑顔に気づいてくれる人なんているのだろうか？

メガネを取ってみる。眩しさに目を細めたけど、世界がクリアに見えた。けれど、スモークのかかっていない視界は毒々しさを持って私を攻撃するようにさえ感じる。スモークをかけていたのはメガネだけじゃない。私は自分に霞みをかけていた。恐怖心を言う霞みを。恐怖心は痛みを持って私を黒く染める気がして私がメガネをかけようとすると、一人の男子が私からメガネを奪った。

男子は自分にそのメガネをかけてみる。

「あれ？　なんかサングラスみたいだし、堂本って何でメガネかけてんの？」

男子をよく見てもその人に見覚えがなかった。私は顔をさあっと赤くして慌てるようにこう言った。

「私、目の色素が薄くて光に目が弱い。だからスモークかかったメガネしてる」

「ふーん」

男子はそういうと今度は私の赤く染まった両頬を手で軽くつねって上に持ち上げた。

「お前さ、笑ってみろよ。いつも思い詰めた顔してつから友達できないんだよ」

男子はそういうと私の頬をつり上げて無理やり笑わせた。

「ていうか、お前むちゃくちゃ餅肌じゃね？ おい、お前からいつのほっぺ触ってみろよ！」

男子はそういうと他のクラスメイトを呼んだ。騒ぎ出したグループ達は恐る恐る私の方へ近づいてくる。恐怖心に顔をひきつらせると男子は私の頬を離してニコツと笑って見せた。

その笑顔は無邪気で故意はない。ただ私がクラスに馴染めるようにしたことだろう。感謝しても怒ってはいけない。

私はぎこちなく頬笑みを返す。

男子は少し怒ったようにもう一度頬をつねる。

「笑顔はこうだ！」

怒ったように無邪気に笑う、その顔を見て少しだけ嫉妬した。この人は私の理想だ。こんな風になりたい。こんなに風に笑いたい。でもできないから私はこの人に嫉妬するしかない。悔しいと思う気持ちの後に付いてくるのは残悪感。私が消えるかわりにこの人の分身がこの世界を生きればいいのになんて陰気ことを考えた。

その瞬間、頭の中に浮かんだのは先生だった。陰気な先生はきつとこんな風に笑ったりしない。先生の毒のある頬笑みを思い浮かべて私はクスッと笑う。

クラスメイトは私の頬を触って歓喜している。他人に触れられるのは嫌だけど、先生の顔を浮かべるとそんな恐怖心さえどうでもよくなった。

男子はそんな私を見て満足そうだった。

「俺さ、羽月幸之助っていうんだ。よろしくな」

私は戸惑いながら、かすれた声で自分の名前を言った。

「私、堂本疾」

友達ができた。そのことが嬉しかった。

なんとなく、嬉しくなると先生に会いに行きたくなる。先生はどん

な顔をしてなんて言うてくれるの？ よかったね？ それともただ棘々しく笑うだけ？ そんなのどうだって良かった。

私は放課後、走って保健室に向かった。

先生はきつと帰り支度をしている。求めないと言っていたくせに先生と一緒に帰れるんじゃないかって期待してる。

通り過ぎる景色がキラキラしていた。木々が太陽に照らされて風が吹いてさっきまで光化学スモッグが出てたっていうのに空気がおいしい。

私は保健室の横向きのドアをがらりと開く。そこには先生がいて黒縁メガネをはずして佇んでいた。息をのむほど先生は綺麗だった。その目は控えめに輝いて黒髪に不釣り合いで、その不釣り合いさが何ともいえない違和感を生み出し、まるで人間じゃないみたいだった。

「どうしたんだ？」

先生は含みのある頬笑みで私を見つめている。なんだろう、息苦しい。どれだけ息を吸っても吸っていないみたいに息苦しい。走ってきたからじゃない。きつとこれは、先生が私をみているからだ。

先生の毒々しさが好き。先生の綺麗な目が好き。

でも先生はその瞳の中に何を隠してるの？ いつも自分の中に何かを隠すように頬笑みに影をつける。陰りをつけて光を当てないように見えないように、先生はいつも何かを隠してるみたい。

「先生、私ね、友達……できたんだよ」

私は荒い息を整えることもせず、先生に言った。先生は少しだけ嬉しそうに微笑んだ。

「そう、君はすごいね」

私はそういわれると照れながら不器用に微笑んだ。

「笑ってくれると思った。先生と私は似てるから」

私がそういうと先生が吹きかけてしまおうと消えてしまいそうな淡い笑みを浮かべた。

「俺も思った。君と俺は似てる」

私はそれを聞いて、先生から発せられる毒のような何かを感じて心臓がドクドクと高鳴り始めた。苦しいのに私はそこから逃げたくはなかった。

先生のネオンのような強く発光する目は見つめたものを右に変えてしまふ神話の化け物、メデューサみたいだ。

「優しさを渴望してる。俺は手に入れられなかったけど、君はすごいね」

先生は消えそうな危うさを持っている。次の瞬間には闇に溶けて霧困気になっているような危うさ。

「話しかけてもらったの、知らない男子に。だから私の力じゃない」
そういうと先生は鞆から携帯を取り出して見つめながらこう答えた。

「それじゃ、君には魅力があるんだよ。可愛い女の子っていう」
二つ折りの携帯を閉めると、先生は携帯を鞆にしまつて部屋の片づけを始めた。私は後を追うように先生に詰め寄った。

「先生の目はどうしてそんなに消えそうなの？」

「そんなこと初めて言われた」

先生はそう言って笑う。毒のある刺々しさを含む人を遠ざける笑い方で。

「先生がそんなふうに笑うのってわざとなの？」

私がそういうと先生が黙った。

「凶星だと黙るんだね」

私が傷口を抉るように追撃の言葉を口にするのと先生が一人事のように呟いた。

「似てるのは目の色が違うだけじゃないんだな。君だつて笑い方は不自然じゃないか？ 人の事とやかく言えないんじゃないか？」

「違うの。否定してたり、気に入らないんじゃない。私はその笑い方好き」

私がそういうと先生がさつきよりは少しばかり大げさに笑う。

「君は面白い子だね。俺の笑い方が好き？ こんなに陰気なのに」

「私は先生が好き」

私はただ必死になって言った。なんだろう？ 好きなんだけれど、想いをガムみたいに何度も味わうように、口にしてしまいたくなる。好きだとか一番薄っぺらな言葉だと嫌悪していたのに、言えば言うほど気持ち膨らんで破裂しそう。

「それ幻想だから」

先生は言葉を紡ごうとする私の唇に手を当てていう。青い目をした先生はとてもきれいで私に夢を見せてくれてるみたいで、一瞬これは幻想なのかと本気で思った。でもこれは現実だ、夢じゃない。

「こんなにきれいな幻想なら飲まれてもいいよ。先生、私を夢の中に連れてってよ」

選んだ言葉は先生の心に届いただろうか？ 先生は初めて笑った。バカにしてるわけでもなく、可笑しくて笑ってるわけでもなく、真っ直ぐに優しく笑った。

「バカナ子」

先生はその黒縁の眼鏡を外した。黒髪の中に潜む幻のような瞳の中には泣きそうな顔をした私が映っていて、そこに映っているスモークがかかったメガネの向こうに緑の目が先生をまっすぐ見つめてる。私の緑の目には笑ってる先生が映っているんだろうか？

そんな事を考えて、先生に外されるメガネからぼやけた視界を閉ざして私は自分の唇にあてられた先生の唇の感触を味わった。柔らかくてとても優しい感触にうっとりする。

ファーストキスが好きな人でよかった。

そんなバカみたいな事を考えて、この状況にただ頬に熱を上げて心臓が暴れ狂って辛いのに、平常心を保っている内側の自分をただ見つめている感覚が不思議だった。

「疾、内緒にできる？」

私は首を縦に振った。

「大切にするよ。だって君は俺を見つけてくれた人だから」

意味は分からなかったけれど、私には何か特別な気がして嬉しくて笑った。

微笑み、見える視界が急に片方見えなくなった。それだけではない、足が腕が、片方だけ動かなくなった。私は見えなくなった目に動く方の手で触れる。感覚がない。視界が霞む。頭が動かなくなったみたいに強烈な眠気に襲われた。なんでだろう？ どうしてなのかな？ 本当に夢の中に連れて行かれたみたいだ。

私はその強烈な眠気に打ち勝つことなんかできず、先生に抱きしめられながら嬉しさと共に眠った。

しばらくすると白い天井と蛍光灯が見えた。頭がぼーっとする。心配そうなお母さんとお父さんが涙ぐみながら見ている。

「どうしたの？」

このどうしてはいろんなニュアンスが含まれている。私はどうしたの？ や、どうして両親がここにいてその目に涙を溜めているの？ とかいろいろな……。

「保健室で倒れたんだよ。先生がここに運んでくれて……お前、大丈夫か？」

お父さんの瞳はいつも私を見るような目じゃなかった。なんだか死に逝く人を見るような悲しいのを諦めたような、でもそれを相手に気づかれないように無理に微笑んでいるようなそんな笑顔。

「お父さん。私、病気なの？ 右目が……見えないの」
私がそう言うとお母さんと顔を見合わせてこういった。

「疾、落ち着いてよく聞くんた。お前、ドッペルゲンガー症候群ってニユースで見たことあるだろう？」

お父さんはそう言うとお涙をこぼした。延々と垂れ流れる言葉を聞いて呆然と先生が頭を浮かんだ。

「先生、どうして耳を塞いだの？ 先生が驚いているの初めて見たよ……先生は、その瞳の中に何を隠してるの？」

先生はそう言うとおすぐく傷ついた顔をした。傷ついて悲しんで、それが永遠に終わらないような絶望に似た感傷が心を反射したように瞳に映る。どうしてだろう、先生はすぐくしっかりして見えるのに、

本当は怯えてるんじゃないかって思うのは。どうしてだろう、先生が迷子の小さな子供に見えてしまうのは。

「保健室でセックスを求めたのは、自分が死んでしまうと思ったから。先生のことばかり考えるのは、きっと先生が私にすごく似ているから。」

息をするのと同じくらい先生のことばかり考えているの。先生の瞳が気になってたまらないの。先生は私と同じだよ？ 私の一部だよ？」

先生は少し黙っていった。

「……少し、昔話をしようか？」

先生は携帯を取り出し、私に見せた。そこには影のない、陰気じゃない先生が太陽みたいに眩しい顔でいるんな人に囲まれながら笑っていた。

「川の石が丸いのはどうしてか知ってる？ 石はね、水に流されて角を削り取られて丸くなっていくんだ。でも、俺達は違うね。ぶつかり合う石を避けて流れてる。痛みを怖がって丸くなるうとしないから触れると人を傷つけて怪我をさせてしまう……。でも、気づいてないだけでみんなそうなんだ。その携帯に写ってる奴も、本当は僕みたいな影をいつも心に背負っていた。僕はね、疾。そいつのドッペルゲンガーなんだ」

「……えっ？」

私は言葉を詰まらせた。何をいえばいいかわからないで、ただ先生の言葉を聞き入るしかできることなどなかった。先生はそんな私を見て悲しく笑う。そして言葉を続けた。

「そいつはね、本当は人が嫌いで仕方がなかった。笑顔の裏でもう心底人と関わりたくないって毛嫌いしてるほどにね。……でも、自分は人気者で今更、人と距離を置くことなんかできない。どうすればって考えてるうちにドッペルゲンガー症候群になった。気持ちが強すぎたんだ。自分のなりたい自分を具現化させてしまうほどに疾、君はドッペルゲンガーになるとどうなるか知ってる？ 存在し

ているだけで、本体の命を奪ってしまう。本体はね、僕がいることを喜んだよ。笑ってお前が俺になればいいのについて死んでいった。でもね、俺は……あいつになりたかったんだ」

先生は言葉を詰まらせて言うと、じんわりと溢れた涙をためらいもなく流した。

「二つに別れた魂は、一つ失うと嘘になってしまふ。俺はあいつが恋焦がれた理想だけとあいつじゃない。恨まれた。憎まれた。人が恋しいのに、人気者から出てきた俺は嘘で固められた影だから誰も俺を見ない、わからない。あいつは俺に飲まれて死んでいった。俺はあいつを殺して本物になった。……嘘なんだ、全部。俺は嘘の存在で偽物で影だ。それでも君は、見つけてくれた。好きになつてくれたんだろう？ ほら、泣かないで。君は俺みたいにならないで」

私は泣いて先生を抱きしめていた。先生は嘘じゃない、少なくとも私にとつたら本物よりも純粹にまっすぐ生きてる。私は先生にキスをした。

先生はそつと私の背中に手を伸ばして抱きしめ返してくれる。それが優しさだって、弱さだっていい。それが恋しいと思うの。愛しいと思うの。嘘にこんな感情は抱かない。だって私は先生が好きなの。「この体温も、この腕の感触も嘘なわけじゃないじゃない。先生は影じゃない。先生は先生なんだ。わがままだけど、先生が好きなの。先生が好きなの」

私はまるでうわ言のように繰り返した。先生は透明な雫を垂らしながら私の名前を何度も読んだ。……何度も何度も、呼び続けた。

本当はね、私。先生が私のドッペルゲンガーだと思つたの。私にとても似ているから。先生と私は同じだから。

先生は泣きながらいった。

「君に消えて欲しくない、君は俺のようやく見つけた光なんだ」

私はいった。心から強く強く願うように。

「消えないよ」

閉ざされた視界が開けていくのを感じた。

私はわかったのだ。自分のドツペルゲンガーは何処にいるか……。自分のなりたかった自分の姿が……。

放課後の教室に行くと、私のドツペルゲンガーが私にっこりと笑いかけた。

「堂本、なんだその顔。辛気くせえ顔だな。笑ってみろって言っただろ？」

羽月君はなんにも知らない顔をして純粹に笑ってみせる。戸惑うように私が羽月君に触れた。頬に触れると暖かい体温が私の冷たい手に移った気がした。羽月君はそんな私に一瞬身をすくめた。

「……堂本？ どうした？」

「羽月君っていつからクラスに居たの？」

私が言葉を飲み込んだような小さな声を出して言うと、羽月君はなんともないような平然とした顔で答えた。

「何言ってるの？ 入学式からずっといるじゃん」

「中学は？」

「えっ？」

「中学は……どこ？」

葉月君は一瞬顔をこわばらせた。

「中……学……、どこだっけ？ ヤバイ、思い出せない……」

羽月君は怯えるように頭を抱えた。そつと手のひらに力を入れて私は勇気を持っていった。

「ドツペルゲンガー症候群って知ってる？」

そう言うと羽月君は少しだけ震えて何も言わなくなった。私は震える声を、泣きそうになる自分を、血が滲むくらい強く握った手のひらの痛みでしっかり保って言い放った。

「私の、ドツペルゲンガー見つけた」

「……ドツペルゲンガー？」

葉月君は呆然と呟いた。呟いて、涙を浮かべた。

「俺は堂本の影なのか？」

「違うよ、羽月幸之助……それは私自身でしょ？ ごめんなさい、私には価値がない。だからあなたができた。私自身を……本当は認めただけなんだよね？ 認めてこの不安定な自分をしっかり保ちたかっただけなんだよね？ 羽月君、私はあなた。あなたは私。だから帰ってきて、私のもとへ。……私ね、好きな人できたの。想い続けて幸せになるの。一緒に幸せになるの」

私は泣いた。泣いて羽月君の手をしっかりと握った。

「堂本、お前バカだな……。笑ったほうがよほど嬉しいのに、泣くなよ。バカ……消えるんじゃない。帰るんだろ？ お前のところに……うん」

光の粉が風に吹かれるように羽月君は消えていく。私はギュツと手を握った。握って笑った。

「また、泣いたら化けて出てやるからな！」

羽月君は笑った。その手は微かに震えているのに、私はそれをごまかすために血が止まってしまくらいきつくきつく握り締めた。

それは弱さだろう？ 私の羽月君の、弱さだろう？ 私は何も変わっていない。この寂しさや苦しさを救われてなんかいない。

ただ一つ、救われようのない寂しさを向き合うことを。誰かとお会うのこの喜びを。私は少しだけ先生のために強くなりたいと願った。

恋焦がれるという言葉を知っていても、気持ちで味わうことなんて一生ないのだと思っていた。抱きしめなくなるほど誰かに執着することはないのだと思っていた。

好きだとか一番薄っぺらな言葉だと嫌悪していたけど、感覚でわかる。この言葉は、人によって色を変えるアレキサンドライト。

「ねえ先生、キスしてよ」

私を教室の外で待っていた先生に私は言う。恥ずかしげもなく、ただ飢餓してしまほどに飢えた心の欲望を抱えて。

「いいよ」

先生は冷たくて心地いい。消え入って混じって一つになればいい。

全てが欲しいと思うほどに求めても足りない私の欲望を煮えたぎらせるこの人は、私の……好きな人だ。

「見つけてくれてありがとう。疾、好きだよ」

私はまた不器用に笑うことしかできない。先生が嘘でもよかった、私が嘘でもよかった。明日がくればよかった。未来があればよかった。望むほど欲は深くなるばかりで、そうやって嘘も本当も瞳の中に隠して、今日という日が過ぎ去っていく。生きてるの。

偽物も本物も、そんなことはどうだっていいほどに溺れて。

(後書き)

読んで下さりありがとうございます！

よろしければ、感想をいただけるとうれしいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7314z/>

瞳の中

2011年12月24日08時49分発行